

# 兜山古墳試掘調査報告書

*ka bu to ya ma*

2003

浅科村教育委員会

# 兜山古墳試掘調査報告書

*ka bu to ya ma*

2003

浅科村教育委員会

## 序

浅科村は、豊かな自然環境に恵まれ、古来から生活の営みの中で文化を育んできました。

この度、村史編纂にあたり村民が、村の成り立ち・歴史・民俗さらにその背景にある自然環境を1冊の村史にまとめることにより、より深く確かな村の姿を理解し、愛郷の心を育てることが重要であると考え、また編纂は生涯学習の一つであり、村民が様々な形で参加・協力することにより、郷土の歴史への理解と関心さらには連帯感が生まれることを願っています。

『浅科村の文化財』の「かぶとやま古墳」の項には、「2つの塚が9メートルをへだててならんでいる。1つの塚の大きさは、直径が20メートル、高さが約4メートルで、一方の塚のうえには金毘羅宮が建っている。しかし、この古墳については、いまのところよくわからない」と記されている。そこで今回、村史編纂事業の一環として、試掘調査をすることによって歴史の不明の部分を明らかにするねらいがあった。

試掘の結果は、この古墳は、5世紀末から6世紀初めごろ築かれ盗掘にあっていない円墳であり、石室を持たず木棺を覆う硬質粘土層から5体あるのではないか等である。財政さえ許され本格調査をすれば、少なくとも長野県の古代史の1ページが変わらるような、国宝級の遺物出土が考えられ、限りないロマンをかき立てられる思いであった。

本報告書は、試掘調査及びその成果をまとめた冊子です。本書が、学術研究、教育資料、地域史研究の一助として多くの人々に活用され、また、村民の皆さんのが文化財に対して関心と理解を深める手引きとなれば幸いです。

最後になりますが、試掘調査を担当された福島邦男先生、田中浩江先生、お手伝いをいただいた調査協力員の皆様、調査主任田中先生を中心に、一致団結和やかなうちにもきつい仕事に挑戦していただき厚く感謝いたします。

平成16年2月1日

兜山古墳試掘調査団 調査団長

浅科村教育長 生駒 悅雄

# 目 次

第1章 調査の経緯.....	1
第1節 調査にいたる経緯.....	1
第2節 宛山古墳調査日誌.....	2
第2章 遺跡の環境.....	3
第1節 自然的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	8
第3章 調査の内容.....	9
第1節 調査の方法.....	9
第2節 封土および主体部の様子.....	9
第1項 宛山第1号古墳.....	9
第2項 宛山第2号古墳.....	16
第3節 出土遺物.....	19
第4節 埋め戻し方法.....	19
第4章 試掘調査の成果.....	21

## 挿図目次

第1図 浅科村遺跡全体図.....	4
第2図 宛山古墳周辺遺跡分布図.....	7
第3図 宛山古墳トレンチ設定図.....	10
第4図 宛山第1号古墳 粘土検出範囲およびセクションポイント配置図.....	11
第5図 宛山第1号古墳 土層断面図.....	12
第6図 宛山第1号古墳 主体部土層断面図.....	13
第7図 宛山第1号古墳 トレンチ拡幅部土層断面図.....	14
第8図 宛山第2号古墳 粘土検出範囲およびセクションポイント配置図.....	15
第9図 宛山第2号古墳 土層断面図.....	16
第10図 宛山第2号古墳 主体部土層断面図.....	17
第11図 宛山第2号古墳 トレンチ拡幅部土層断面図.....	18
第12図 宛山第2号古墳 土師器出土状況.....	19
第13図 宛山古墳 出土遺物実測図.....	20

## 表 目 次

第1表 浅科村遺跡一覧表.....	5
第2表 宛山古墳周辺遺跡一覧表.....	7
第3表 出土土器観察表.....	20
第4表 出土古錢・石器観察表.....	20

## 写真目次

P L 1 第1号古墳遠景.....	25	P L 7 第2号古墳粘土範囲2検出状況.....	25	P L 12 第1号古墳粘土範囲1 および2検出状況.....	26
P L 2 第2号古墳遠景.....	25	P L 8 第2号古墳粘土範囲2検出状況.....	25	P L 13 現地説明会.....	26
P L 3 第1号古墳粘土範囲2検出状況.....	25	P L 9 宛山古墳出土古錢.....	26	P L 14 調査団スナップ.....	26
P L 4 第2号古墳粘土範囲1検出状況.....	25	P L 10 宛山古墳出土土器 および石器.....	26	P L 15 第1号古墳粘土範囲1 および2検出状況.....	26
P L 5 第1号古墳粘土範囲1検出状況.....	25				
P L 6 第2号古墳粘土範囲1検出状況.....	25	P L 11 第1号古墳粘土範囲1検出状況.....	26		

## 例　　言

- 1 本書は、浅科村村史編纂に伴う兜山古墳の埋蔵文化財試掘調査報告書である。
- 2 土層および遺物の色調は、農林水産省技術会議事務局監修の新版『標準土色帳』(1993年)を使用した。
- 3 本書に掲載の遺構写真は田中浩江が撮影したものである。また、遺物の写真は田中浩江が撮影したものを使用した。
- 4 本書の構成・編集は田中が行った。
- 5 本書に掲載の土層断面図は、現場において田中が作成し田中がトレースしたものを使用した。
- 6 本書に掲載した遺物実測図は、すべて田中が直視測点実測により作成し田中がトレースしたものを使用した。
- 7 本書に掲載した遺物拓影図は、田中が作成したものを使用した。
- 8 兜山古墳試掘調査によって得られたすべての考古資料および実測図・写真的記録類は、浅科村教育委員会が保管している。
- 9 本書に掲載した遺構図のうち第12図は現場において造り方実測にて田中が作成し田中がトレースしたものを使用したが、それ以外の全てはユー・アール測量社によるものであり、多くの便宜を図っていただきいた。記して感謝の意を表したい。
- 10 出土打製石斧の石質については浅科村史自然編執筆者の渡辺正喜氏（佐久町立佐久中学校校長）に鑑定していただいた。
- 11 調査期間中および本書作成にあたっては、多くの方々からご指導、ご協力を頂いた。ここにご芳名を記して、改めてご厚意に対し深く感謝の意を表したい。（敬称略）  
矢島宏雄　土屋 積　風間栄一　飯島哲也　向山純子　矢島洋子　風間真起子  
望月貴弘　勝見 謙　野口 淳　鈴木徳雄　木幡成雄
- 12 本書の執筆は、以下の通り分担し、文末に文責を記した。  
第1章　調査の経緯……福島・田中　　第2章　遺跡の環境……福島  
第3章　調査の内容……田中　　第4章　調査のまとめ……土屋

## 凡　　例

- 1 本報告書の遺構図中の用例は、以下の通りである。
  - 1) 縮尺率　平面図：紙面スペースにより不同。図中スケールにて表示　断面図：1/40　1/60
  - 2) 方位は座標北（国土座標）を用いた。
  - 3) 断面図に示した数値は、海拔高度（標高）を示し、単位はmである。
  - 4) 平面図のアルファベットは断面図の作成位置を示す。
  - 5) 粘土の検出範囲は、網点で処理した。
- 2 本報告書の遺物図中の用例は、以下の通りである。
  - 1) 縮尺率　土器：1/3　古銭：2/3　石器：2/3

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

兜山古墳試掘調査は、浅科村史編纂の一環で実施した学術調査である。

本古墳は、すでに昭和11年に発行された『長野県町村誌』第二巻東信篇の八幡村のところに「兜塚」と掲載されているが、あまり意識されずに今日に至っていた。5世紀代の古墳として意識されはじめたのは昭和50年代からではあるが、特に注目されてきたのは、平成9年・10年に実施した国庫補助事業浅科村遺跡詳細分布調査のときで、山頂に位置するという立地条件や形状、規模から改めて5世紀代の古墳との認識にたち、数少ない貴重な存在として記録に留めている。

村内28基の古墳（消滅古墳も含む）のうち、本古墳だけは主体部の基本的な構造が不明であることや、5世紀代にあっても詳細な時期については不明であるため、これらを明らかにし、しいては数少ない5世紀代の佐久地方の古墳及び古墳時代前半の社会の様子を知る手がかりを得たいこともあり、試掘調査を実施することになった。

平成14年9月25日に浅科村史刊行会が招集された。引き続き第1回編纂委員会が同年12月12日に開催され、編纂項目についての論議の中で兜山古墳の試掘調査の必要性がすでに語られた。その後、2月11日の編纂委員会を経て、試掘調査を実施する方向で予算あるいは組織的に可能かどうかの検討に入った。2月26日には、測量の方法と仮見積りのため、業者と現地での協議を行った。3月5日には、測量の仮見積書が提出されその内容について検討を行った。これらの総体的な見地から、予算的にも組織的にも試掘調査可能と判断し、早速その具体的な準備に入った。

3月24日から古墳及び周辺地域の雑木の伐採を開始し、3月31日に完了した。その後、古墳全景の写真撮影を4月6日に実施した。また、試掘調査決定時点ですでに委託してあった現地測量は、伐採と写真撮影の終了した4月7日から開始し、4月17日に終了した。23日には、成果品の内容確認を測量業者とを行い、修正箇所の打合せを行う。

4月25日に兜山古墳試掘調査事前打合せ会議を浅科村地区福祉センターで開催し、組織、調査の方法、日程などについて話し合いを行った。翌26日には、浅科村全域の古墳の写真撮影を実施し、兜山古墳も改めてその対象に含めた。4月30日には、試掘調査のための器材の点検を行う。そして、5月5日に結団式を挙行し試掘調査を開始した。

(文責 福島邦男)

#### 兜山古墳試掘調査団組織

- ・調査團長 生駒悦雄（浅科村教育長）
- ・担当者 福島邦男（望月町教育委員会、日本考古学协会会员）
- ・調査主任 田中浩江（長野県考古学会会员）
- ・村史調査員 小泉政志 依田酒造雄 峯村製宏雄（佐久考古学会会员） 土屋 修 山浦 巍
- ・協力員 土屋なおい 宮澤志ゆく 篠原浜子 工藤松子 佐藤クニ子 宮崎 豊  
松沢政夫 木角繁夫 木角辰次 井出功雄 工藤七三男 春原紀夫
- ・特別指導者 矢島宏雄（千曲市教育委員会） 土屋 積（中野西高校教諭） 望月貴弘
- ・事務局 浅科村教育委員会 塩川里美（社会教育係長）  
浅科村史編纂室 依田 俊 宮澤洋子

## 第2節 鬼山古墳調査日誌

- 5月5日（月） 機材搬入、テント設営、結団式。  
第1号古墳：No2南トレンチ設定および表土剥ぎ。  
第2号古墳：No1トレンチ設定および表土剥ぎ、墳頂部封土掘り下げ主体部確認作業、  
No1トレンチ墳頂部封土内よりNo1遺物出土、遺物出土状況写真および状  
況図 作成・レベリングの後遺物取り上げ。
- 5月6日（火） 第1号古墳：No2南トレンチ設定および表土剥ぎ。No1トレンチ清掃写真記録。No2北  
トレンチ設定および表土剥ぎ。  
第2号古墳：No1トレンチ墳頂部封土掘り下げ主体部確認作業続行。No2トレンチ設定  
および表土剥ぎ。第2号古墳No1トレンチ墳頂部封土内よりNo2遺物出土、  
遺物出土状況写真および状況図作成・レベリングの後遺物取り上げ。
- 5月7日（水） 第1号古墳：No1トレンチ設定、No2トレンチ設定および表土剥ぎ。No2トレンチ墳頂  
部封土掘り下げ主体部確認作業・粘土郭主体部検出。  
第2号古墳：No1トレンチ墳頂部封土掘り下げ主体部確認作業・褐色粘土検出。範囲確  
認のためNo3トレンチ設定・掘り下げ。No1北トレンチ土層断面図作成、  
No1トレンチ墳頂部封土内よりNo3遺物出土、遺物出土状況写真およびレ  
ベリングの後取り上げ。
- 5月8日（木） 雨天のため現場作業休み、室内にて図面修正
- 5月9日（金） 第1号古墳：主体部検出作業続行。No2トレンチ清掃、写真記録。No1トレンチ表土剥  
ぎ。  
第2号古墳：主体部検出作業続行。No2トレンチ清掃、写真記録。No3トレンチ主体部  
検出作業。
- 5月10日（土） 第1号古墳：主体部より硬質粘土検出。No1トレンチ掘り下げ作業。  
第2号古墳：主体部より硬質粘土検出。No2トレンチ清掃、写真記録。No3トレンチ主  
体部検出作業。
- 5月12日（月） 第2号古墳：墳頂部トレンチ壁面精査。トレンチ内精査。
- 5月13日（火） 第1号古墳：トレンチ内精査。
- 5月14日（水） 第1号古墳：No1トレンチ括幅掘り下げ。硬質粘土および埋設土坑 プラン検出作業。  
第2号古墳：No2トレンチ壁面セクション図作成。硬質粘土および埋設土坑 プラン檢  
出作業。No3トレンチ括幅掘り下げ。No1トレンチ南掘り下げ。トレンチ設  
定図作成。
- 5月15日（木） 雨のため休み。
- 5月16日（金） 第1号古墳：No2トレンチ掘り下げ。No1トレンチ括幅掘り下げ。硬質粘土範囲および  
埋設土坑プラン検出。トレンチ設定図および粘土範囲平面図作成。  
第2号古墳：No2トレンチ括幅掘り下げ。硬質粘土および埋設土坑プラン検出。  
トレンチ設定図レベリング。
- 5月17日（土） 第1号古墳：硬質粘土範囲および埋設土坑プラン検出。  
第2号古墳：No2トレンチ西括幅掘り下げ。No5トレンチ掘り下げ。硬質粘土および埋  
設土坑プラン検出。

- 5月19日（月） 第1号古墳：トレンチ壁面精査。  
第2号古墳：No.2 トレンチ東掘り下げ。No.5 トレンチ掘り下げ。No.1 トレンチ南掘り下げ。
- 5月20日（火） 第1号古墳：土層断面図作成。
- 5月21日（水） 第1号古墳：No.1 トレンチ北・南掘り下げ。No.2 トレンチ東掘り下げ。  
第2号古墳：No.2 トレンチ西掘り下げ。No.1 トレンチ北掘り下げ。
- 5月22日（木） 第1号古墳：No.1 トレンチ南掘り下げ。  
第2号古墳：No.2 トレンチ西掘り下げ。
- 5月23日（金） 第2号古墳：土層断面図作成。  
ユーアール測量社による測量図（平面図・コンタ図）作成  
現地説明会準備。
- 5月24日（土） 第2号古墳：土層断面図作成。  
第1号古墳および第2号古墳土層説明記入。  
現地説明会を行う。
- 5月26日（月） 埋め戻し作業：主体部およびトレンチ内清掃→主体部に砂を約4～5cmの厚さに敷く→  
壌上げ土により埋め戻す。
- 5月27日（火） 埋め戻し作業：壌上げ土により埋め戻す→傾斜部および隣接土地付近に土留めのための  
土壠配置。  
機材整理および撤出。
- 5月28日（水） テント撤収・機材整備にて全て完了。

## 報告書作成作業行程

5月29日（木） 出土遺物洗浄・土器接合作業・調査日誌作成。

5月30日（金） 出土遺物拓本作業・調査日誌作成。

12月15日～1月8日 挿図作成作業

2月17日～2月20日 編集作業

(文責 田中浩江)

## 第2章 遺跡の環境

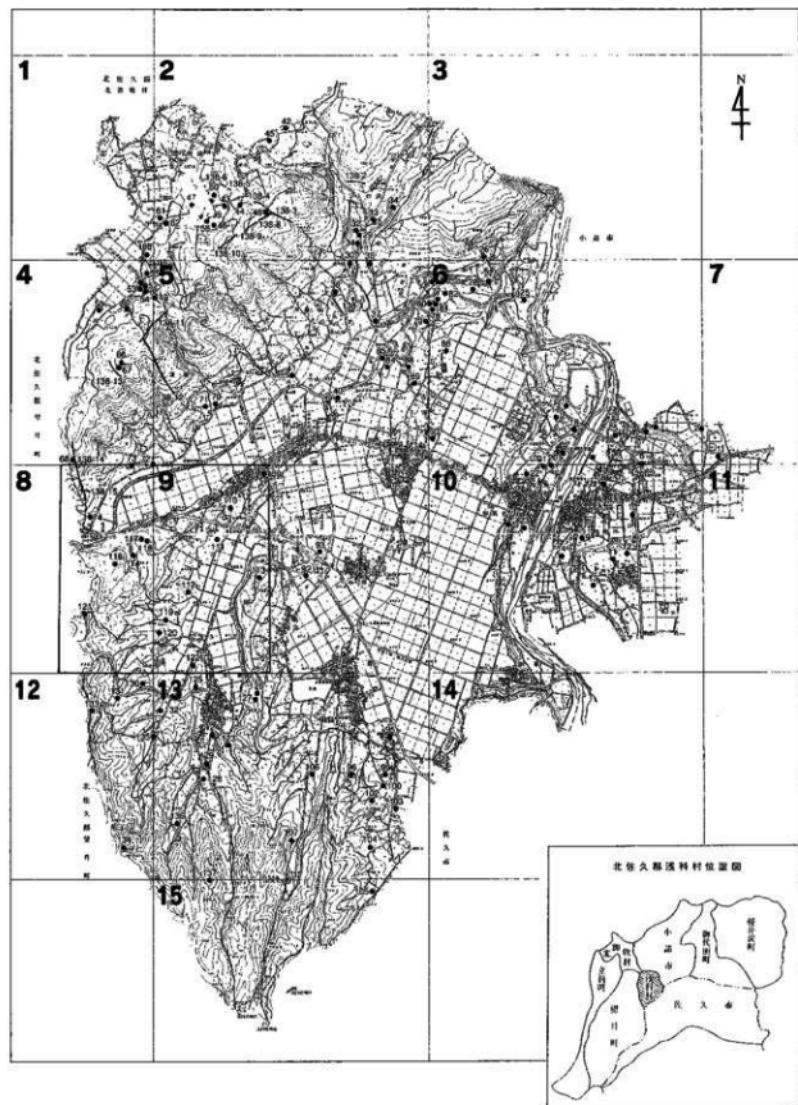
### 第1節 自然的環境

浅科村は、八ヶ岳火山群蓼科山系の北東部裾野及び北方には隆起台地である御牧原台地の南端からその裾野に位置している。総面積は20km<sup>2</sup>で、その半数は農地であり山林は25%に過ぎない。

蓼科山の裾野は比較的なだらかな里山であり、豊富な水に恵まれてはいるが、浅科村においては水源が乏しい。一方御牧原地域は、火山性堆積層に覆われており、須釜原から尾尻にかけては湿地が見られるが、やはり水源が乏しく用水に依存しなければならない地域である。

浅科村の地質構造の特徴は、南部に広がる蓼科火山による安山岩形成地域、北部における第三系鮮新世から更新生にかかる小諸層群や完新世の火山灰・火山碎屑物からなる御牧原台地地域（1962 日本の地質）、中央部の低地においては千曲川や布施川で形成された河岸段丘が発達し、周囲には「相浜層」（模式地：

## 浅科村遺跡全体図



第1図 浅科村遺跡全体図 (1999. 3『浅科村遺跡詳細分布調査報告書』より転載)

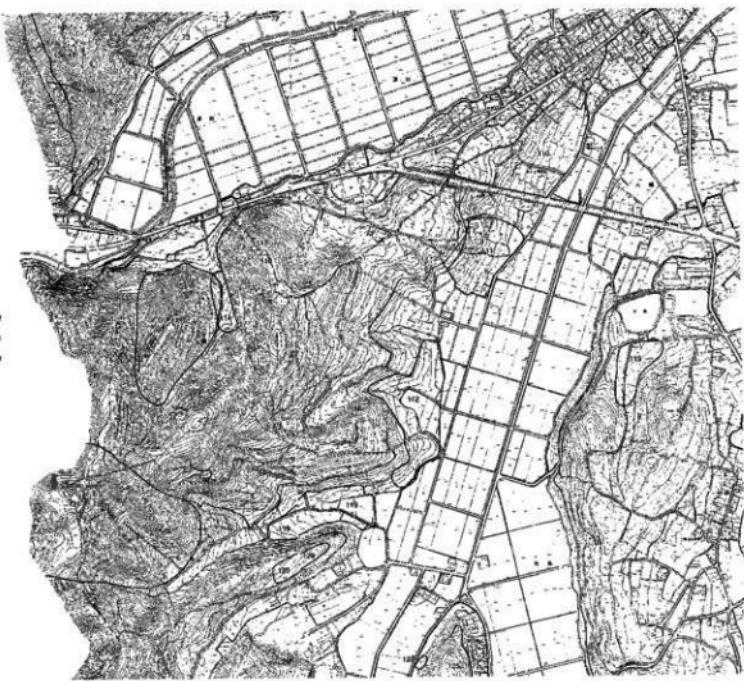
第1表 浅利村遺跡一覧表

番 号	地圖 ( ) 番号	遺 跡 名	所 在 地	出 土 品	縦 文		先 古	古 墓	寺 古	中 古	近 代	
					学	鏡						
1.	7	新町A南跡	塙名田字新町	○								
2.	6・7	新町B北跡	塙名田字新町	○								
3.	6	8094(3)	利口古墳	塙名田字利口下								
4.	6	(5)	利口古墳	塙名田字利口下	○							
5.	6	769(4)	砂利遺跡	塙名田字砂原	○		○	○	○	○		
6.	6・10	川上遺跡	塙名田字川上主	初	○							
7.	6・10	下川原遺跡	塙名田字下川原	○								
8.	10	田森遺跡	塙名田字田森	○								
9.	10	房ノ山A北跡	塙名田字房ノ山	○								
10.	10	海老町B南跡	塙名田字海老町	○								
11.	10	760(2)	房ノ山	塙名田字房ノ山	○		○	○	○	○		
12.	10	8095(3)	房ノ山	塙名田字房ノ山	○							
13.	10	676(1)	船ノ保遺跡	塙名田字船ノ保	○	○	○	○	○	○		
14.	10	川原遺跡	塙名田字川原	○								
15.		262	上利口遺跡	塙名田字上利口	○							
16.	6	1004(6)	小舟遺跡	塙名田字小舟	○		○	○	○	○		
17.	6	765(7)	田舟古遺跡	塙名田字田舟	○		○	○	○	○		
18.	6	勝ノ谷城跡	塙名田字勝ノ谷	○								
19.	6		下利口遺跡	塙名田字下利口	○							
20.	6・10		船ノ保遺跡	塙名田字船ノ保	○							
21.	6・10	(8)	上利口	塙名田字上利口	○		○	○	○	○		
22.	10	766(9)	上の山古墳	塙名田字上山	○							
23.	10	761(10)	神ノ山遺跡	塙名田字神ノ山	○							
24.	10		上ノ山古墳	塙名田字上ノ山	○							
25.	5		伊佐ノ山遺跡	塙名田字伊佐ノ山	○		○	○	○	○		
26.	3	762(36)	火の山鉢穴塚	塙名田字火の山	○							
27.	5		久保田A南跡	塙名田字久保田	○							
28.	6		久保田B北跡	塙名田字久保田	○							
29.	2	779(44)	人の山遺跡	塙名田字人の山	○		○	○	○	○		
30.	5	8097(43)	人の山古墳群第1号古墳	塙名田字人の山	○							
31.	2		人の山古墳群第2号古墳	塙名田字人の山	○							
32.	2		人の山古墳群第3号古墳	塙名田字人の山	○							
33.	2		人の山古墳群第4号古墳	塙名田字人の山	○							
34.	2		人の山古墳群第5号古墳	塙名田字人の山	○							
35.	—		八屋田古墳	塙名田字八屋田	○							
36.	5	780(42)	山塙遺跡	塙名田字山塙	○		○	○	○	○		
37.	5	795(41)	陶込遺跡	塙名田字陶込	○	○	○	○	○	○		
38.	5		上ノ山遺跡	塙名田字上ノ山	○							
39.	—	776	梅天神跡	塙名田字梅天神	○							
40.	5	757(34)	新塙古墳	塙名田字新塙	○							
41.	5	778(45)	羽神ノ山遺跡	塙名田字羽神ノ山	○	○	○	○	○	○		
42.	2		御牧原尾跡	塙名田字御牧原	○							
43.	2		御牧原A道跡	塙名田字御牧原	○							
44.	2		御牧原B道跡	塙名田字御牧原	○							
45.	2		御牧原C道跡	塙名田字御牧原	○							
46.	2		御牧原島崎第八古墳	塙名田字御牧原島崎第八古墳	○							
47.	2		御牧原島崎第九古墳	塙名田字御牧原島崎第九古墳	○							
48.	2	(57)	高上見跡	塙田字御牧原	○							
49.	4・5	7058(35)	第五回古墳	塙田字御牧原	○	○	○	○	○	○		
50.	4	(54)	高上遺跡	塙田字高上	○							
51.	4	(56)	須蜜原第2施設群第1号古墳	塙田字須蜜原第2施設群第1号古墳	○							
52.	4		須蜜原第2号古墳	塙田字須蜜原第2号古墳	○							
53.	4		須蜜原第3号古墳	塙田字須蜜原第3号古墳	○							
54.	4		須蜜原第4号古墳	塙田字須蜜原第4号古墳	○							
55.	5		須蜜原第5号古墳	塙田字須蜜原第5号古墳	○							
56.	2		須蜜原第6号古墳	塙田字須蜜原第6号古墳	○							
57.	2		須蜜原第7号古墳	塙田字須蜜原第7号古墳	○							
58.	2		須蜜原第8号古墳	塙田字須蜜原第8号古墳	○							
59.	2		須蜜原第9号古墳	塙田字須蜜原第9号古墳	○							
60.	2		須蜜原第10号古墳	塙田字須蜜原第10号古墳	○							
61.	2		須蜜原第11号古墳	塙田字須蜜原第11号古墳	○							
62.	2		須蜜原第12号古墳	塙田字須蜜原第12号古墳	○							
63.	—		須蜜原第13号古墳	塙田字須蜜原第13号古墳	○							
64.	—		須蜜原第14号古墳	塙田字須蜜原第14号古墳	○							
65.	4		須蜜原第15号古墳	塙田字須蜜原第15号古墳	○							
66.	4		西行塙第1号古墳	塙田字西行塙第1号古墳	○							
67.	4		西行塙第2号古墳	塙田字西行塙第2号古墳	○							
68.	4		西ノ平古墳	塙田字西ノ平古墳	○							
69.	—		川久保遺跡	塙田字川久保	○							
70.	5	10053(45)	唐沢古墳	塙田字唐沢	○							
71.	5	793(49)	鹿武遺跡	塙田字鹿武・水越町、庵守田	○							
72.	4・5・8	791(51)	猿ヶ沢古墳	塙田字猿ヶ沢・中村、社吉寺田	○							
73.	4・8	766(52)	寺原遺跡	塙田字寺原	○							
74.	8	790(53)	西ノ平遺跡	塙田字西ノ平	○							
75.	—	783(31)	吹上遺跡	塙田字吹上	○							
76.	—		下ノ原遺跡	塙田	○							
77.	5・6	767(37)	土合遺跡	甲子土合	○							
78.	6	768(38)	七合古墳群第1号古墳	甲子土合	○							
79.	5		七合第2号古墳	甲子土合	○							

第1表 浅科村遺跡一覧表

番号	地図 ( ) 番号	遺跡名	所在地	編文						弥生 古墳 奈良 平安 中世 近世	
				田 石 差	前	中	後	晚	小	中後	
80	6	土合第3号古墳	甲子土合								○
81	6	土合第4号古墳	甲子土合								○
82	6	土合第5号古墳	甲子土合								○
83	6	土合第6号古墳	島山奈久保田								○
84	5	773(31) 山ノ出遺跡	甲子山ノ出								○
85	5	(40) 山ノ古墳	甲子山ノ田								○
86	6	大字遺跡	甲子大坂								○
87	—	10049(30) 桑木辺道跡	甲子桑木道								○
88	5	山ノ塙跡	甲子山ノ塙								○
89	5	山ノ塙跡	甲子山ノ塙								○
90	5・6	家原遺跡	甲子家原								○
91	—	770(11) 反原遺跡	甲子反原								○
92	9	中野向原A遺跡	甲子向原、原平								○
93	9	中野向原B遺跡	甲子向原								○
94	—	10057(21) 桜井遺跡	甲子櫻井田								○
95	13	10046(11) 西原古墳	甲子西原寺								○
96	13	馬場古墳	甲子馬場沢								○
97	—	774(14) 反原沢古墳	甲子反原沢								○
98	—	772(15) 桜井古墳	甲子桜井林								○
99	13	10047(12) 一本松遺跡	甲子一本松								○
100	13	打鹿遺跡	甲子打鹿								○
101	—	10048(13) 打鹿遺跡	甲子打鹿								○
102	13	高木東遺跡	甲子高木東								○
103	13	大山空跡	甲子大山								○
104	13	新井遺跡	甲子新井								○
105	15	見立保溝跡	甲子見立保								○
106	13	大久保溝跡	甲子大久保								○
107	13	少佐久保溝跡	甲子少佐久保								○
108	1	舞鶴遺跡	甲子舞鶴								○
109	9	784(33) 岩原遺跡	甲子岩原水久保、八幡宇岩原								○
110	9	785(32) 男根A遺跡	八幡宇男根								○
111	9	男根B遺跡	八幡宇男根								○
112	9	(58) 大字遺跡	八幡宇大平・風山・平								○
113	9	789(26) 鹿島山遺跡	八幡宇鹿島								○
114	8	787(29) 明治遺跡	八幡宇明治								○
115	—	(30) 鳥居遺跡	八幡宇鳥居								○
116	8	鳥居城跡	八幡宇鳥居城								○
117	8	先原第1号古墳	先原第1号古墳								○
118	8	先原第2号古墳	先原第2号古墳								○
119	8・9	10050(24) 駒久保A遺跡	駒久保A遺跡								○
120	8・9	駒久保B遺跡	駒久保B遺跡								○
121	8	(27) 唐古遺跡	矢吹唐古								○
122	9	西原保溝跡	矢吹西原保								○
123	13	京沢J遺跡	矢吹京沢								○
124	13	786(21) 仁義遺跡	矢吹仁義								○
125	9・12・13	(23) 小久保城跡	矢吹小久保城・下原城・中國城・小久保								○
126	13	(22) 天神城跡	矢吹天神城								○
127	13	天神遺跡	矢吹天神								○
128	13	宮越遺跡	矢吹宮越								○
129	13	10064(20) 宮越D遺跡	矢吹D宮越								○
130	12	天神要連跡	矢吹天神要連								○
131	12	10061(24) 天神要連跡	矢吹天神要連								○
132	13	猪大保城跡	猪大保城								○
133	12	(26) 猪大保城跡	猪大保城								○
134	12	城越城跡	城越城								○
135	12・13	貴久保久保溝跡	貴久保久保溝								○
136	13	10055(19) 前ノ宮遺跡	久保前ノ宮・雨ノ宮入								○
137	15	(18) 上山J神社遺跡	矢吹上山J神								○
138-1	5	豊月牧野野馬跡	入の沢地点	豊月J牧野野馬							○
138-2	2	豊月牧野野馬跡	御牧原地点	豊月J牧野野馬							○
138-3	2	豊月牧野野馬跡	御牧原地点	豊月J牧野野馬							○
138-4	2	豊月牧野野馬跡	御牧原地点1	豊月J牧野野馬							○
138-5	2	豊月牧野野馬跡	御牧原地点2	豊月J牧野野馬							○
138-6	2	豊月牧野野馬跡	御牧原地点3	豊月J牧野野馬							○
138-7	2	豊月牧野野馬跡	御牧原野馬山地点	豊月J牧野野馬山							○
138-8	2	豊月牧野野馬跡	御牧原野馬山地点	豊月J牧野野馬							○
138-9	2	豊月牧野野馬跡	御牧原野馬山地点5	豊月J牧野野馬							○
138-10	2	豊月牧野野馬跡	御牧原野馬山地点6	豊月J牧野野馬							○
138-11	4	豊月牧野野馬跡	清洲・中村馬點	豊月J牧野野馬							○
138-12	4・5	豊月牧野野馬跡	中村地点	豊月J中村							○
138-13	4	豊月牧野野馬跡	御牧原・松ヶ沢	豊月J御牧原・松ヶ沢							○
138-14	8	豊月牧野野馬跡	西ノ平・御沢堀	豊月J西ノ平御沢堀							○
138-15	8	豊月牧野野馬跡	梅沢・西ノ平堀	豊月J梅沢							○

(1999.3『浅科村遺跡詳細分布調査報告書』より転載)



第2図 宮山古墳周辺遺跡分布図（1999.3『浅科村遺跡詳細分布報告書』より転載）

第2表 宮山古墳周辺遺跡一覧表

村番号	遺跡名	所 在 地	立地	時 代					備 考
				縄文	弥生	占墳	奈良	平安	
72	松ヶ沢遺跡	蓬田字松ヶ沢・中村・社 宮寺田	山麓				○		中村遺跡792を含める
73	寺田遺跡	蓬田字寺田・西ノ平	山麓			○			平成6年発掘調査（10集）
74	西ノ平遺跡	蓬田字西ノ平	山麓			○			「西の平」を「西ノ平」に改名
109	宿遺跡	蓬田字清水久保 八幡字堅致	丘陵			○			半廃
110	神明A遺跡	八幡字神明	丘陵			○			「神明」を「神明A」に改名
111	神明B遺跡	八幡字神明	丘陵			○			一部破壊
112	大平遺跡	八幡字大平・氣山・平	丘陵	○					平成9年発掘調査
113	椎原山遺跡	八幡字椎原山	山麓			○			一部破壊
114	鈴川遺跡	八幡字砂山	山麓			○			一部破壊
116	鳥久保城跡	八幡字鳥久保	山麓				○		
117	兜山第1号古墳	蓬田字鳥久保 八幡字移山	山頂		○				現存
118	兜山第2号古墳	蓬田字鳥久保 八幡字砂山	山頂		○				現存
119	楓久保口A遺跡	八幡字楓山 矢島字楓久保口	山麓				○		「楓久保口」を「楓久保口A」に改名 一部破壊
120	楓久保口B遺跡	矢島字楓久保口	山麓				○		
121	虚空藏城跡	矢島字虛空藏下・ 鳥久保・鳥角子板	山林					○	一部破壊
125	矢島城跡	矢島字城平・下屋敷・中 屋敷・西久保・上屋敷	山林					○	一部破壊

註) 本表の兜山古墳の所在地は浅科村教育委員会の意向を受け1999.3『浅科村遺跡詳細分布報告書』を訂正して掲載している。

佐久市相浜）と呼ばれる非常にいろいろな湖沼性堆積層が発達して、各所に露頭箇所をみることができる。この相浜層は、凝灰岩、泥岩、砂岩及び礁質砂岩などで幾層にも互層しており、ほぼ水平層に近い。泥岩層からは、針葉樹や広葉樹あるいは珪藻類の化石が産出されている。

村の東側には大河千曲川が日本海まで流れ、蓼科山から流下する布施川は、やがて御牧原台地の南麓に沿って千曲川に注いでいる。

兜山古墳は、浅科村の西寄りでほぼ中央部の小高い尾根筋に位置しており、標高718mである。この尾根は、蓼科山から望月町と境を接して延びる裾野であり、やがては標高地上の地形となり千曲川まで続いている。瓜生坂を越えて古墳の北側を通過する中山道は、八幡地区からこの尾根の稜線に沿って千曲川に至り渡河している。

## 第2節 歴史的環境（第1・2図、第1・2表）

浅科村の歴史的環境は、すでに1997年から1998年に発掘調査を実施し、2002年2月27日に長野県佐久地方事務所および財長野県埋蔵文化財センターが発行した『県単農道整備事業（ふるさと）大野田地区埋蔵文化財発掘調査報告書－浅科村内一駒込遺跡』に記述され、また、1994年に浅科村教育委員会が発行した『浅科村の文化財新版』の分布図と地名表が掲載され概要がのべられており、さらに、1998年に発掘調査を実施し、2002年3月31日に発行した『海戸田A遺跡－保険センター建設事業にかかる発掘調査－』には、昭和56年発行の『長野県史考古資料編（=）遺跡地名表』段階の63遺跡を浅科村の遺跡数とし、発掘調査を実施した経緯を中心に歴史的環境を示している。しかし、これらの内容は1997年から1998年の2カ年に国庫補助事業により浅科村全域の遺跡分布調査が実施され、すでに1999年3月に『浅科村遺跡詳細分布調査報告書』が刊行されていた段階であるので、いずれの記述も旧態の資料ではなく最新データによって記述がなされればより明確な状況が把握できたものと思われる。

詳細分布調査報告書によれば、村遺跡番号だけでも既存報告書データーの68遺跡に対して138遺跡があり、しかもそこに15の枝番号が存在する。かつてのデーターに比べて2倍以上の遺跡数になっている。また、遺跡の範囲も詳細に記録されており、かなり正確なものになっている。ただ、68遺跡の位置は大きくずれているわけではないので、大方の目安にはなっている。

さて、今回調査した兜山古墳は、5世紀前半の佐久平では数少ない極めて重要な古墳であることがほぼ判明しており、科野国における古墳時代研究の貴重な資料として位置付けることができる。

この頃の古墳の分布は、4世紀後半に築造された佐久市の蘿ノ峯古墳群第1・2号古墳や未発掘であるが5世紀代の望月町協和の内裏塚第1・2号古墳、同町春日の姫塚古墳が古墳時代の古い段階の古墳として存在している。6世紀代に入ると、望月町協和の山の神第1・3・4号古墳（第2号は未調査）が前半の古墳として位置づき、6世紀後半から7世紀初頭にかけて築造された佐久市安原の蛇塚第1号古墳が続く。7世紀から8世紀までの古墳は、浅科村を含め蓼科山北麓や佐久平一円に多数分布しており、律令期のこの地域の繁栄を見ることができる。

兜山古墳周辺の歴史的環境は、第2表に示したとおり、蓼科山から延びる尾根の山頂部に兜山古墳と城跡の主郭が位置し、山麓地域には绳文時代から平安時代の集落址を中心とした遺跡が分布している。

縄文時代は、大平遺跡の発掘調査で出土した遺物のみで、平安時代の遺跡が圧倒的に多いのが特徴である。やはり、望月牧が最も繁栄している時期であり、分布の在り方にも納得がいく。

本時期の主題である古墳時代の遺跡は、周辺地域においては皆無と言わざるを得なく、千曲川の周辺まで範囲を広げてみても、砂原遺跡、原遺跡、船久保遺跡、上川遺跡、御馬寄遺跡、川久保遺跡、硯久保遺

跡の7遺跡しか確認されておらず、砂原遺跡を除いては、小星の土器が採集されているにすぎない。平成4年に浅科村教育委員会が実施した北佐久農業共済組合の建設に伴う砂原遺跡の発掘調査においては、古墳時代前期の住居址は1軒、後期の住居址4軒、掘立柱建物址1軒、土坑2基が見つかっている。また、平成6年に北陸新幹線建設に伴う鶴長野県埋蔵文化財センターの発掘調査では、古墳時代前期の住居址11軒、そのうち前期初頭は4軒、後期の住居址は20軒、掘立柱建物址1軒、土坑2基が見つかっている。兜山古墳の時期である5世紀前半の遺跡は、今のところ砂原遺跡が中心的な存在であり、規模からみても被葬者の生活基盤である集落の候補として注目する必要があるのではないかと思われる。

(文責 福島邦男)

## 第3章 調査の内容

### 第1節 調査の方法 (第3図)

第1号古墳・第2号古墳各々において国家座標南北と東西を軸とする十字にトレントを設定し、主体部は埋葬施設の構造に到達するまで掘り下げた。その後、必要に応じて最小限の埋葬施設平面形が把握でき得るようにトレントを拡幅し掘り下げた。主体部以外においては表土除去にとどめ裾部の溝構造を伴うか否かを確認すべく、できる範囲でトレントを延長して調査を行った。

溝構確認後は溝構を傷めぬ配慮をしながら現状に復すように埋め戻しを行った。なお埋め戻し法については本章第4節にて後述してある。

### 第2節 封土および主体部の様子

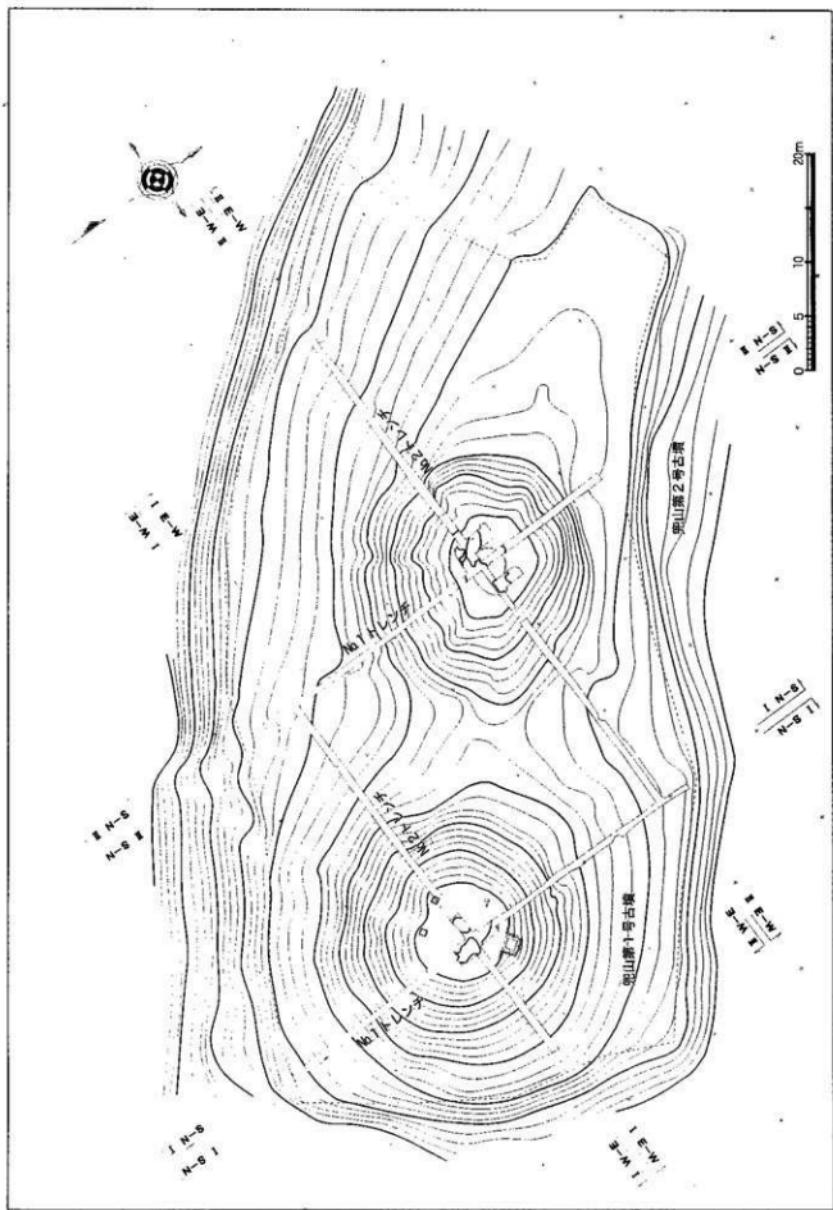
#### 第1項 兜山第1号古墳

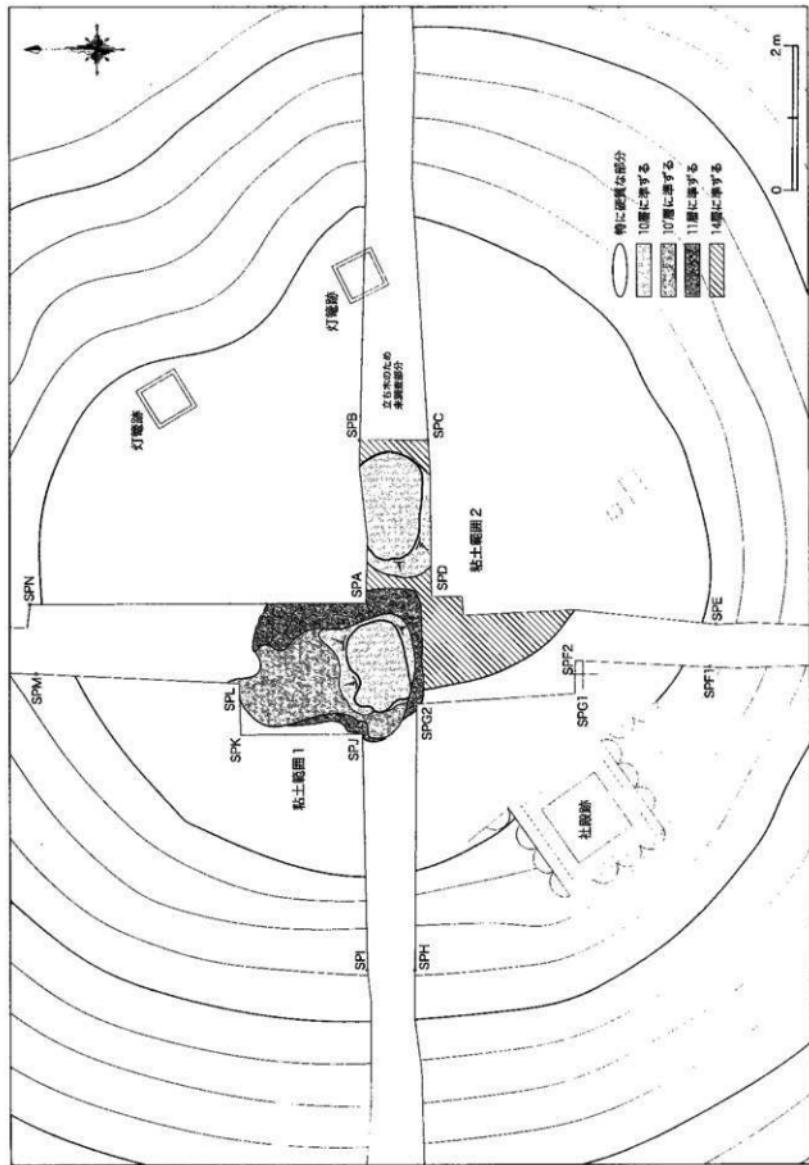
##### 1) 封土について (第4・5図)

第1号古墳の封土は26層に大別され、一見して多重層を呈するかのようであるが、主体部北東部の一部が粘性のないバサバサしたローム質土に覆われており分層数を増やす結果となっている。それらはI N-S 東面壁の第14・15・19・20層、I W-E 南面壁のD-Cラインの第21・22・23・24・26層に対応しており封土全体の様相から観て異質感を覚える。硬質粘土として確認した層は第10層および第10'層であり、その多くは現地表面より100~130cm程深い面に確認出来るが前述した粘性のないバサバサしたローム質土の堆積する箇所においては現地表面より20~40cmの浅い面よりブロックとして確認できる傾向にある。

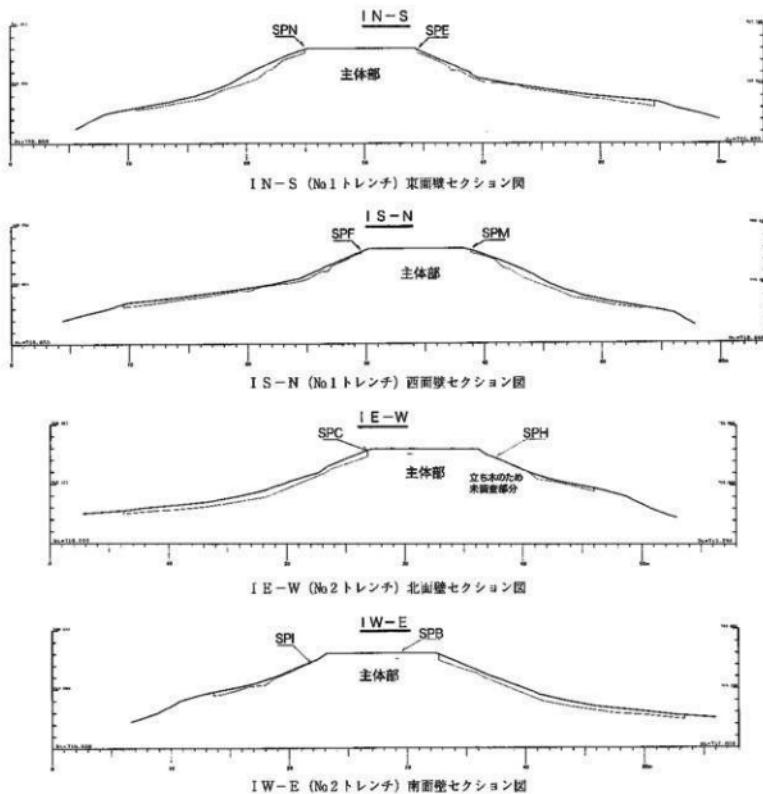
前述した粘性のないバサバサしたローム質土の解釈としては、しまりのあるにぶい褐色土として分層した第2層の堆積状況が手掛かりになると考えられる。つまり第2層はI S-N (No 1 トレント) 西面壁F 1-G 2ライン上においては表土第II層直下で粘性のないバサバサしたローム質土である第15層の直上に堆積しているが、I W-E (No 2 トレント) 南面壁H-G 2ラインにおいてはやはり表土第II層直下に堆積しているものの第15層の下に潜る堆積状況を呈しており第15層を古墳構築時の構築土層とするならば粘性のないバサバサしたローム質土をも古墳構築時の構築土層として把握せざるを得なくなる。第1号古墳は天保年間に古墳としての聖域の意味合いを民間信仰として、西南部に社殿が建てられており粘性のないバサバサしたローム質土はその構築時の埋め戻し土としての可能性もあるが今回の試掘調査では判然としないため現段階での言及は差し控えたい。

第3図 犬山古墳トレンチ設定期





第4図 児山第1号古墳 粘土検出範囲およびセクションポイント配置図



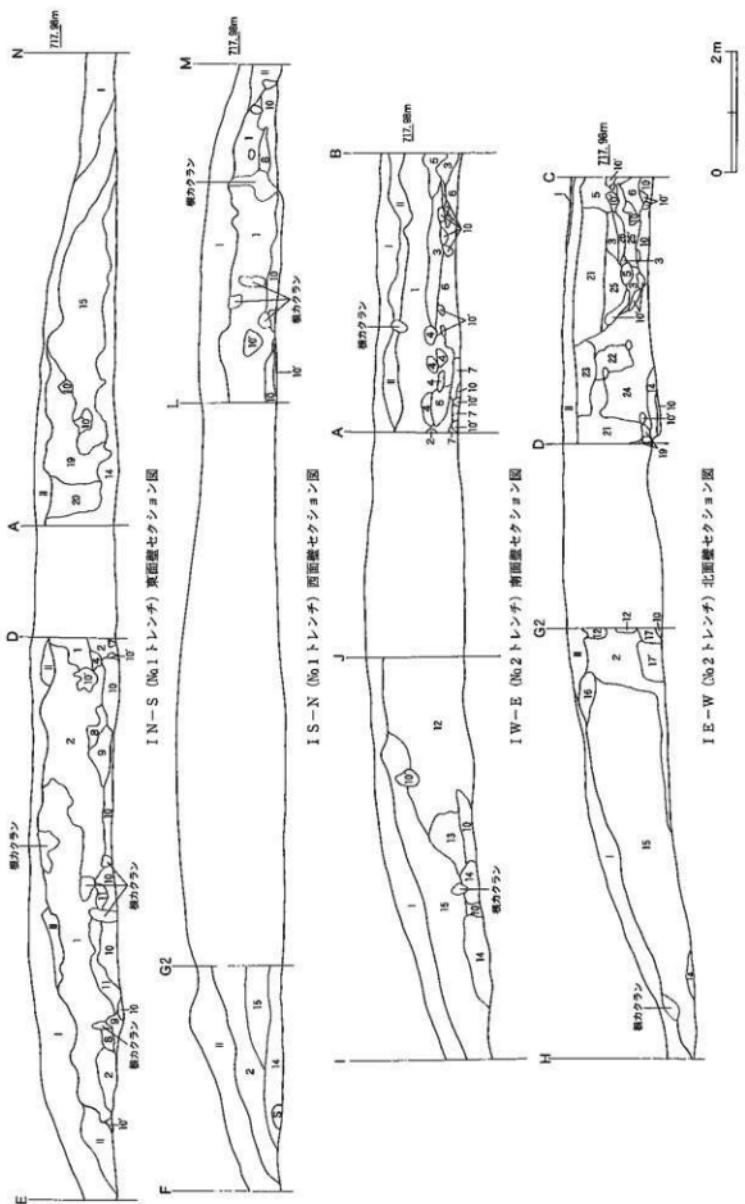
第5図 穂山第1号古墳 土層断面図（主体部は第6回に別途掲載）

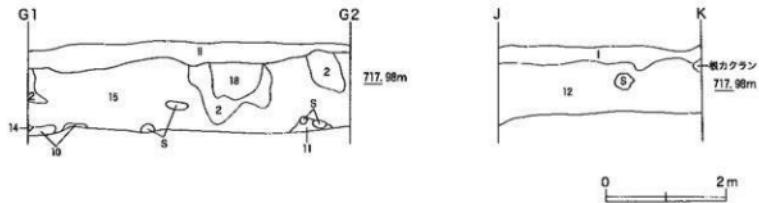
## 2) 主体部について（第6・7図）

No. 1 TrenchとNo. 2 Trench上に硬質粘土が確認された。「粘土層」といった呼称について筆者には概念規定の知識をもたないが、ここではNo. 1 Trench内のものを〈粘土範囲1〉No. 2 Trench内のものを〈粘土範囲2〉と称して各々についての詳細を以下に記述することとする。

### 〈粘土範囲1〉

墳頂部中央よりやや北西に寄ったNo. 1 Trench内で現地表面より約125cmの深さで非常に硬い灰黄褐色粘土を検出したため、Trenchを西に拡幅した（S P J - S P K）。粘土範囲は長軸をNW11°を測りその長さは約250cmを測り、短軸はSW12°を測りその幅は140~170cmを測る。粘土質は封土層序第10層に相当しNo. 1 粘土範囲の南端部は南北に約70cmの幅で特にカチカチな硬質部分が確認できた。その硬質部分は北側に向かい途切れると同時に粘土部分も約15cmの比高差を持ちながら平坦になり封土層序第10'層に相当





第7図 児山第1号古墳 トレンチ拡幅部土層断面図

第1号古墳封土土層説明

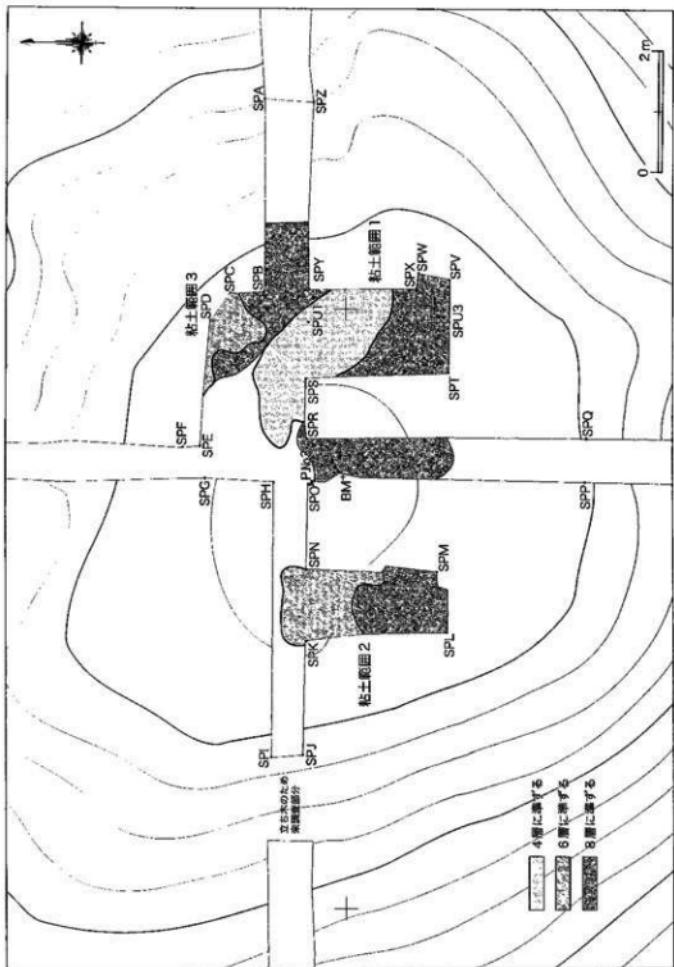
I 層	黒褐色土	10YR2/3	表土層。粘性なし、しまりなし。砂岩粒をあまり含まない腐葉土。
II 層	暗褐色土	10YR3/3	表土層。粘性なし、しまりややあり。I層に比して若干色調明るい。
1 層	褐色土	7.5YR4/3	粘性なし、しまり堅固。キメ繊細く、径0.5cm大の砂岩礫多く僅かに含む。
2 層	にぶい褐色土	7.5YR4/2	粘性ややあり、しまり堅固。径0.5~1cm大の粘土ブロック多量に含む。
3 層	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性ややあり、しまりあり。径0.5cm大の砂岩礫少量含む。
4 層	灰黄褐色土	7.5YR4/2	粘性なし、しまりあり。キメ繊細く、含有物を持たない。
5 層	暗褐色土	7.5YR3/3	3層に近似するが、含有物より多量。
6 層	暗褐色土	7.5YR4/2	粘性ややあり、しまりなし。径0.5cm大の砂岩礫僅かに含む。
7 層	灰黄褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりなし。キメ繊細く、含有物を持たない。
8 層	黒褐色土	7.5YR5/4	2層主体に粘土ブロックやや含む。
9 層	にぶい褐色土	7.5YR5/4	8層に近似するが、より粘土ブロック少量。
10 層	灰黄褐色土	10YR4/2	粘性強、しまり堅固の粘土層。キメ繊細く、含有物を持たない。
10' 層	灰黄褐色土	10YR4/3	10層と準ずる粘土ブロックでより堅固。
11 层	にぶい褐色土	7.5YR5/4	8層主体に径1cm大の砂岩礫少量含む。
12 層	にぶい褐色土	10YR4/3	粘性なし、しまりあり。径0.5~5cm大の砂岩礫非常に多量含む。
13 層	にぶい褐色土	10YR4/3	13層に近似するがしまりなし。
14 層	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性なし、しまりなしのバサバサした土質。含有物なし。
15 層	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性ややあり、しまりありのサラサラしたキメ繊細か土質。径0.5~1cm大の砂岩礫僅かに含む。
16 層	にぶい褐色土	10YR5/3	粘性なし、しまりなしのバサバサした土質。径0.5cm大の砂岩礫僅かに含む。
17 層	にぶい褐色土	7.5YR5/4	粘性強、しまり堅固の粘土質土。径0.5~1cm大の砂岩礫少並合。
17' 層	褐色土	7.5YR4/3	17層に近似するが含有物やや少。
18 層	暗褐色土	7.5YR3/4	粘性ややあり、しまりあり。径0.5~1cm大の砂岩礫僅かに含む。
19 層	にぶい黄褐色土	10YR6/2	粘性なし、しまりなしのサラサラしたローム質土。径0.5cm大の砂岩礫少並合。
20 層	にぶい黄褐色土	10YR6/3	19層に近似するが、より含有物の多いローム質土。
21 層	にぶい黄褐色土	10YR5/3	粘性なし、しまりなしのもうろこ状のローム質土。径0.5cm大の砂岩礫僅かに含む。
22 層	明黄褐色土	10YR6/6	粘性なし、しまりなしのもうろこ状のローム質土。径0.5cm大の砂岩礫僅かに含む。
23 層	にぶい赤褐色土	5YR4/4	粘性なし、しまりなしの、もうろこ状のローム質土。径0.2cm大のローム粒僅かに含む。
24 層	にぶい赤褐色土	5YR4/4	粘性なし、しまりなしの、もうろこ状のローム質土。含有物を持たない。
25 層	にぶい褐色土	7.5YR5/4	粘性ややあり、しまりややあり。径0.5~1cm大の砂岩礫僅かに含む。
25' 層	にぶい褐色土	7.5YR5/4	25層主体だが、より含有物多量。
26 層	灰褐色土	5YR4/2	粘性なし、しまりなしの、もうろこ状の、キメ繊細かサラサラの土質。含有物を持たない。

する土質となりやや軟質になる。

粘土範囲検出範囲の外周に封土層序第11層に相当するにぶい褐色土が検出されており、南北方向は北側に延びる平面プランは粘土範囲とほぼ同じ規模で消えてしまう。東西においては西側が粘土範囲より僅かに広い範囲で途切れ、東側はトレンチの外に延びる様相を呈している。

〈粘土範囲2〉

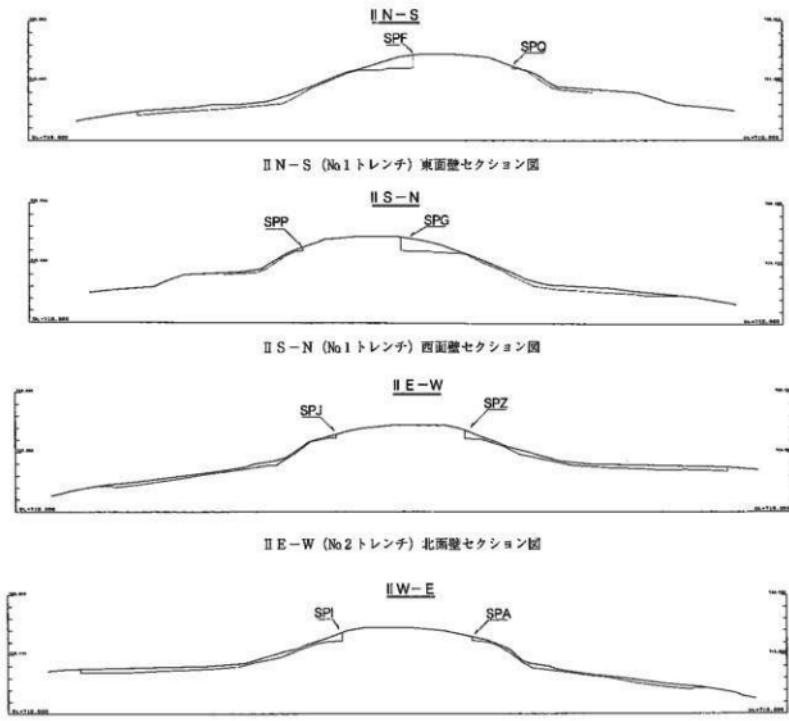
墳頂部のほぼ中央に位置し現地表面より約100cmの深さで非常に硬い粘土を検出した。粘土範囲はほぼE-W軸に沿い長さ約160cmの幅で検出され、直交する軸は幅100cmに設定したトレンチ幅より南北両側に延びている。時間の関係でトレンチの拡幅調査は行わなかったため、その規模と平面の全容プランは把握しきれず、粘土範囲の存在の確定にとどめた。粘土質は〈粘土範囲1〉と同様で封土層序第10層に相当する



第8図 鬼山第2号古墳 粘土検出範囲およびセクション点記置図

カチカチな硬質粘土である。

粘土範囲検出範囲の外周にはやはり封土層序第14層に相当する暗褐色土が検出されているが、(粘土範囲1)に比してその平面プランの規模は広く、(粘土範囲1)のにぶい褐色土(封土層序第11層)に先行する形で検出された。その範囲は粘土範囲端部より約150cm東方に延長しており西方は立ち木のためトレンチを延長できず南北同様に不明である。



II W-E (No. 2 トレンチ) 南面壁セクション図

第9図 兜山第2号古墳 土壙断面図

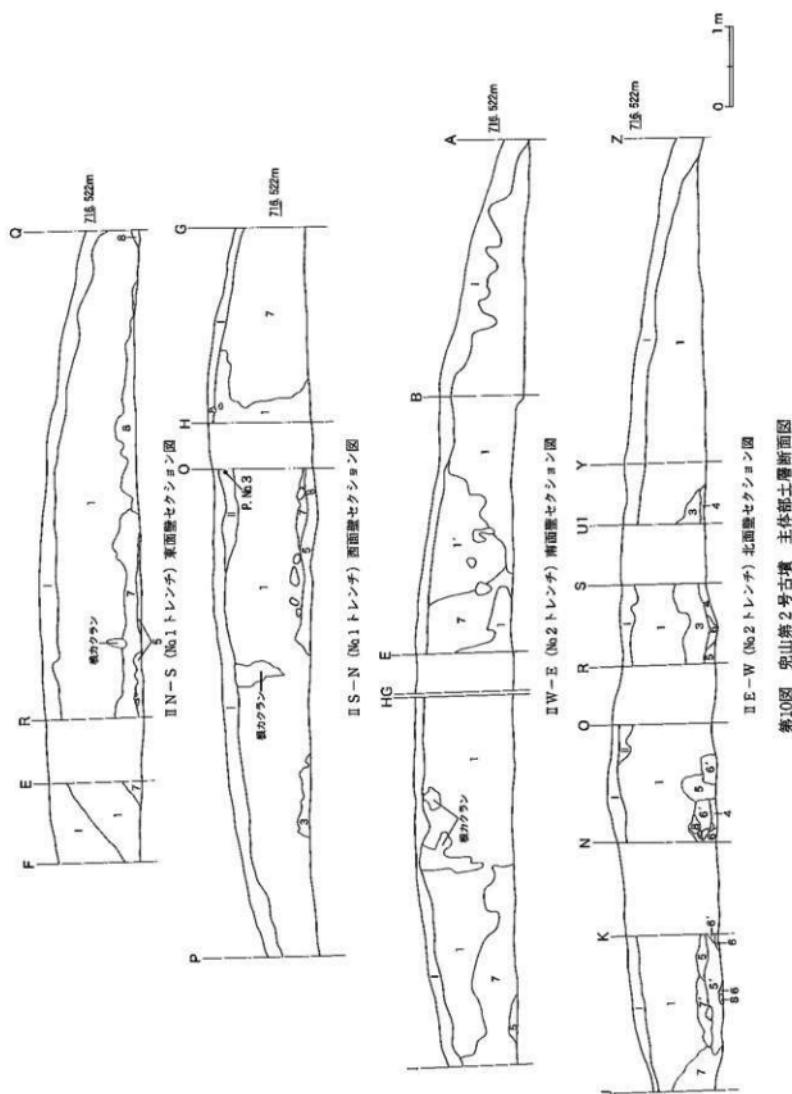
## 第2項 兜山第2号古墳

### 1) 封土について (第4・8・9図)

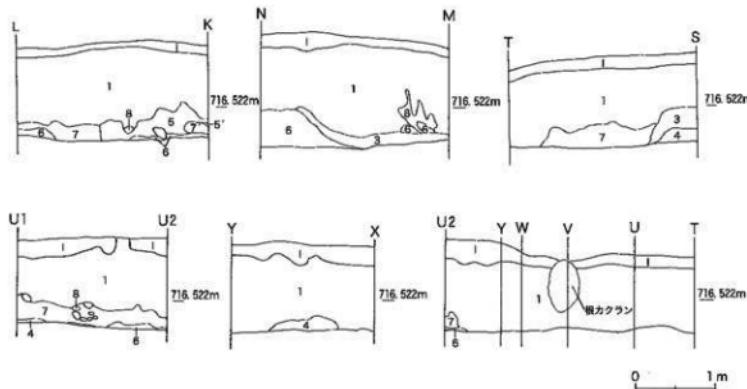
8層に大別分層ができた。第2号古墳の粘土は乾燥するカチカチのレンガ様に硬くしまる第1号古墳同様の土質のものと、粘性の非常に強い湿り気を持つ強粘土のものとがある。前者は封土層序第6・第6'層、後者は第4層にあたる。

### 2) 墳頂部について (第10・11図)

非常に粘性の強い褐色粘土はNo.2トレンチ内より2箇所、拡幅トレンチ内より1箇所検の計3箇所で確認できた。これら3箇所の南側には封土層序第8層に相当する黒褐色土層が広く伸びているが、粘土範囲の外周を囲むと云った様相は確認できなかった。粘土範囲についてはNo.2トレンチ内検出のものを〈粘土範囲1〉〈粘土範囲2〉拡幅トレンチ内のものを〈粘土範囲3〉として兜山第1号古墳と同様に以下に詳細を記述する。



第10図 穂山第2号古墳 主体部土層断面図



第111図 鬼山第2号古墳 トレンチ拡幅部土層断面図

第2号古墳封土土層説明

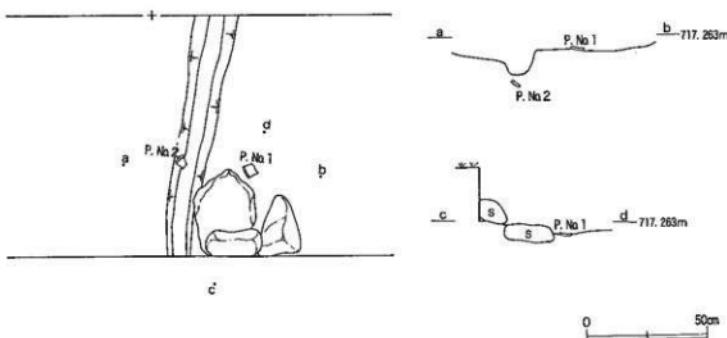
I 层	黒褐色土	10YR2/3	表土層。粘性なし、しまりなし。砂岩粒をあまり含まない腐葉土。
II 层	暗褐色土	10YR3/3	表土層。粘性なし、しまりややあり。1層に比して若干色濃明るい。
1 层	褐色土	10YR4/4	粘性ややあり、しまりあり。粘土質土主体に径0.5~4cm大の砂岩礫多量に混入し、第2号古墳封土の主体を占める。
1' 层	褐色土	10YR4/4	1層に類似するが砂岩礫を含まない。
2 层	黒褐色土	5YR3/1	粘性なし、しまりなし。径1~1.5cm大の砂岩礫僅かに含。
3 层	にぶい褐色土	7.5YR5/4	粘性あり、しまり堅固。径1~4cm大のキメ細かい粘土ブロックを多量含み、径0.5~2cm大の砂岩礫少量。
4 层	明赤褐色土	5YR3/6	粘性極めて強、しまりあり。径1~5cm大の砂岩礫を小量含み、0.5×1cm大の炭化粒僅かに含。乾燥しても湿り気を持ち粘性のある粘土層。
5 层	褐色土	10YR4/4	1層・7層に近似するが7層より粘性なく、しまりなし。径1~3cm大の砂岩礫。
5' 层	暗赤褐色土	5YR3/4	粘性強、しまりやや弱の粘土層。径1cm大の砂岩礫僅く僅かに含むが、含有物をあまり持たない。
6 层	褐色土	7.5YR4/3	粘性あり、しまり堅固でキメの細かい粘土層。含有物を持たない。乾燥するとカチカチのレンガ様に固まる。
6' 层	褐色土	7.5YR4/3	6層主体でよりしまり頗るの粘土層。径0.5cm大の炭化粒僅かに含。
7 层	褐色土	7.5YR4/3	1層に近似するがよりしまりなく、粘性あり。径1~10cm大の砂岩礫多量に含。
7' 层	褐色土	7.5YR4/3	7層主体に径3~5cm大の砂岩礫多量に含。
8 层	黒褐色土	5YR3/1	粘性あり、しまりありの粘土層。

〈粘土範囲1〉

現地表面より約130cmの深さで、その平面形は橢円形を呈し長軸はNW58°を測りその長さは3mを測った所で東南方向にトレンチから外へ延びている。短軸はSW37°を測りその幅は約116cmある。強粘土第4層はトレンチ拡幅部Y-Xラインに観られるように中央が盛り上がる様子を呈しており、盛り上がりの中央は平坦面をもつが長軸に沿い中央にやや窪みを持っている。

〈粘土範囲2〉

現地表面より110cmの深さで検出された。その平面形は南北軸に約130cmを測るもの東西軸は幅100cmのトレンチ内に東西両側を延ばしており平面プランおよび規模は不明である。断面は拡幅トレンチ断面図M-Nの第6層に観られるように約45cm盛り上がる様子を呈しており、盛り上がりの中央は平坦面をもつが長軸に沿い中央にやや窪みを持っている。



第12図 兜山第2号古墳 土器器出土状況

### 〈粘土範囲3〉

No.2 トレンチ東部の拡幅トレンチ内から現地表面より120cmの深さで検出された。その平面形は北側に延びており、平面プランおよび規模は今回の調査では把握しきれなかった。確認された粘土質は封土層序第6層に相当し、兜山第1号古墳の粘土質と同様である。

## 第3節 出土遺物 (第10・12・13図)

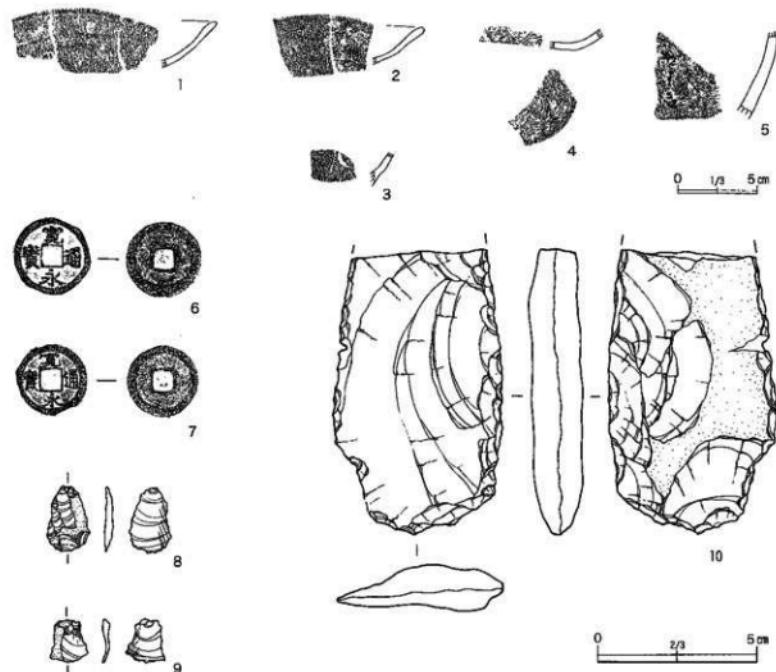
土器片5点、黒耀石2点、打製石器1点、古銭2点が全て表土中より出土している。

13図の1~4は内面黒色処理された土器器片ですべて第2号古墳より出土している。1は第2号古墳のNo.1トレンチほぼ中央部表土第II層中より標高レベル5cmを上下して出土した接合資料である。その出土状況は第12図に示した。2は1よりやや北側の平面位置でやはり表土第II層より出土している。丁度No.1トレンチ壁面に露呈するように出土しており、その出土状況はII S-Nセクション図中に表記してある。3はNo.2トレンチ墳丘裾部に近い表土第I層中より出土した。4は出土位置を記録することは出来なかつたが墳頂部表土中より出土している。5は帰属時期の判然としない土器片である。6・7は『寛永通寶』の銘を持つ古銭で6の方が径が若干大きく文字が潰れており、7の文字は細く明瞭である。8・9は黒耀石のチップで共に皮を残しており、石質は不純物を持たず漆黒色である。10は砂岩製の打製石斧で基部を欠損するが片面に自然面を残す。遺物内容・出土位置から考えていざれも兜山古墳構築時に伴う遺物とは考えにくい。

## 第4節 埋め戻し方法

本調査で掘り下げたトレンチ部分は検出遭撃を傷めないように、望月町協和の鉄平石採掘現場から運んだ石を細かく碎いて砂利にしたものと千曲川野沢付近から採取した川砂を混ぜたもの1.5m<sup>3</sup>を平均になるよう敷き詰めた後、掘り返し土により埋め戻した。なお、敷いた砂利の厚さは5cm平均になる。

(文責 田中浩江)



第13図 兜山古墳 出土遺物実測図

第3表 出土土器観察表

辨別 番号	器種	部位	文様	内調整	色調		施成	注記	備考
					外画	新面			
1	土師器坏	口辺部	ロクロヨコナデ	内黒	7.5YR3/3	7.5YR4/1	堅古	兜山2号No1・No2封土中No1レ	平安
2	土師器坏	口辺部	ロクロヨコナデ	内黒	7.5YR2/3	7.5YR4/1	堅古	兜山2号No3	平安
3	土師器坏	胴部	ロクロヨコナデ	内黒	7.5YR6/3	7.5YR3/1	堅古	兜山2号No2レ東灰土	平安
4	土師器坏	底部	ロクロヨコナデ・底部切口離し摩滅のため不明	内黒	7.5YR3/2	7.5YR4/1	堅古	兜山2号填頂表土中	平安
5	不明		摩滅著しく不明	不明	7.5YR6/4	7.5YR5/4	軟質	兜山2号No1レ・墳頂部封土	不明

第4表 出土古銭・石器観察表

辨別 番号	種別	遺存状態	詳細観察	縦・横・厚 (mm)	質量 (g)	注記	備考
6	古銭	完形	寛永通宝 新	14・14・1	1	兜山1号No1北トレ表上	江戸時代
7	古銭	完形	寛永通宝 古	12・12・1	1	兜山1号No2レ東灰土	江戸時代
8	黒耀石チップ		皮付き	20・13・3	1	兜山2号No1レ・北BM2付近表土	繩文
9	黒耀石チップ		皮付き	12・13・2	1	兜山2号No2レ東掘表土中	繩文
10	打製石斧	基部欠損	基部を欠損するが、横長の剥片素材を使用し表面に自然面を残す。断面は片側が厚い水滴様を呈し、厚い側辺に外側からの剥離調査が施されるが、対称する薄い側邊はほどぞ剥離調査はされていない。	84・59・16	86.5	兜山1号No2レ・西表上	繩文

## 第4章 試掘調査の成果

### はじめに

さきに浅科村史編纂事業に伴う古墳の発掘調査の見学行に、更埴市（現千曲市）教委の矢島宏雄さんから誘われた。佐久市周辺の古墳については、実査等によりなじみがあったが、浅科村所在の古墳には何の知識もなかった。御牧原からの連想で後期古墳かと想像したが、翌日、矢島氏の案内で墳丘を遠望し、その思い込みが間違いであることがあきらかとなった。近隣にはない立地・墳丘の様相は中期以前の古墳であろうと思わせた。先年、新潟大学が継続調査中の新潟県六日町の飯綱山古墳群を見学したが、雰囲気がよく似ている。福島・田中両氏の説明を受けた埋葬施設周辺の状況からいっそうその感を深めた。その後、墓壙のトレント調査が進んだ段階でもう一度見学させていただいた。

測量図以外の資料がほとんどない状態で、数度見学しただけでこの古墳について考察めいた記載をするのは適任とも思えず、分にあらずとも思うが、県内と地域の古墳研究にとって重要資料となると思われるのであえて考えたことを記しておきたい。

### 立 地

浅科村内の多くは比較的なだらかな丘陵が広がり、丘陵の間には狭い低地があり組んでいます。低地は川筋で水利も良いが、丘陵地は水に恵まれず、そのために古くから先人の努力が続けられてきたことは、ここに記すまでもなく広く知られている。古墳はそのようななだらかな丘陵のなかでも縁部にあって、周囲より一段高まりを見せるピーカーを占め、東方の佐久平方面への遠望が利く位置にある。北から東方の直下には谷沿いに水田地帯が広がる。山上の古墳は、狭い場所に作られること多く、墳丘が地形に制約されて本来の形態を実現できずに変形していることがあるが、この古墳の周囲は比較的平坦な余地があり、整った形を示している。

国道142号が直下の谷あいを通過しているが、これは旧中山道のルートであり、また、律令期東山道の推定ルートでもある。源訪あるいは松本からいくつかの峠を越える山間のルートを抜け、佐久平の平地を初めて見渡すことができる位置に古墳は所在する。古墳時代の交通路も当然予想されるところであり、遠くは畿内と東国、近くは諏訪・松本から佐久地域を結ぶ重要なルートのひとつであったろう。古墳がこの位置に築かれたことも地域間交流ルートとのかかわりを思わせる。

調査以前に墳丘上に社殿があり、石碑なども見られる。古墳としての認識に基づくものかどうかはわからないが、盗掘などの改変が加えられることなく古墳が残ってきたのは、ここが信仰の対象として人々から尊重されていたことによるのかもしれない。

### 墳 丘

実測図から見れば、古墳は第1・2号古墳とも造出などを持たない円墳と思われる。トレント調査の結果や裾の傾斜変換線から見て、第1号古墳は直径24m高さ3~3.5m、第2号古墳は直径22m高さ2.5~3m、前者の方がやや大きい。裾間で相互の距離は10mほど離れている。従来示されていた数値と大差ない。墳頂の平坦面が広いことが目立ち、第1・2号古墳ともに直径8mほどある。周囲の状況から見て、社殿の築造などにより削平された結果ではなく、本来の形状であろう。

発掘の結果からも墳丘には葺石等の外表施設は持たないようである。また、墳丘の中段に段築の存在を示すような所見もない。墳丘は地山土で築成されており、水平または互層を成すというより大きなブロック

ク状になる部分が多い。少なくとも表面に近い部分では版築のような堅固な方法がとられていないようである。墳丘の途中でとどめられたトレンチの観察では地山と盛土の区別も判然としないが、墳頂部周辺では墓壙にかかるのではないかと思われる落ち込み状の土層が見られる。

墳丘周囲に周溝などは存在しないようである。裾部外周にも平坦面などの存在は明瞭ではない。

### 埋葬施設

墳頂部の調査では墓壙上面を検出したものと思われる。石室等の石を用いた施設の可能性はほとんどないであろうが、通常の粘土構などの施設に典型的に見られるような状況を示していない。粘質土や周囲と異なる土質が帯状になったりして、埋葬施設主体部の本質が腐朽して陥没した状況ではないかとうかがわせる部分が何箇所か見受けられた。それは周囲が地山と同質なのに対し、粘土構に棺の周囲を取り囲んで分布するような状況に見えた。

墓壙上面の全貌が露呈しているわけではなく、埋葬施設が現状よりどれくらいの深度にあるかもわからない現状で、埋葬施設の構造や形状を推測するのは困難である。異なる土質の広がりの方向や墳丘上の位置から、あえて想像すれば、第1号古墳では墳丘中央の南北方向に長さ5m以上、幅1m程度の棺を墳丘の盛土とは質の異なる土で埋め戻した木棺直葬にちかい埋葬施設を、第2号古墳では同様のものが北西—南東方向に2基並列することを考えておきたい。墳頂部の広く平坦な古墳は長大な埋葬施設を有することが多く、ときに2ないし3基を並列させることもある。このような埋葬施設は、中野市の七瀬古墳群・京塚古墳などに見られる。これらはいずれも5世紀後半代を中心とする円墳である。複数埋葬もまた同時期の特徴のひとつである。

### 年代等の検討

古墳と同時期と考えられる出土品は皆無である。遺物から年代上の位置を考えることはできない。しかし、今回の調査によって古墳に伴うと考えられる遺物が出土しなかったことから、墳丘上・墳丘周囲あるいは埋葬施設上での土器祭祀が行われなかつたことを示していると考えてよいだろう。前期古墳の場合、埋葬施設上で小型土器類が出土する場合が多く、横穴式石室の可能性がなく後期古墳ではないとすれば、中期古墳であることの根拠とできるかもしれない。中期のうちでも前半期には墳丘から土器を出土する場合が多く、あえて言えば後半期であろうか。

前期古墳の場合は、葺石・段築・外周テラス・周溝などの墳丘施設が存在してよいのではないかと思われる。さらに長野県内の前期古墳は石室・墓壙になんらかの形で礫石を用いている。石が見られないことも前期古墳ではないことの理由のひとつになるかもしれない。県内の様相の類似する古墳のほとんどが5世紀後半台から6世紀初めまでの古墳であり、多くが前代に古墳の系譜をもたない地域に新たに出現している。この古墳もまた、同じ時期に古墳造営が拡大してゆく中でこの地に築かれたものと理解しておくことができるのではなかろうか。

第1・2号古墳が、二代にわたる小首長墓と見るに無理はないであろう。その先後については、規模のわずかな差、占地の優位性とともに第1号古墳が勝ることから、1・2号の順序で築かれたものと考えておきたい。いずれにしても様相は極めてよく似ており、一世代以上の年代差はあまり考えられない。

長野県内で、中期に直葬または粘土構が卓越するのは限られた地域である。諏訪市のフネ古墳は方墳であるがその一例である。最も目立つ分布地域は中野市域で、京塚古墳は円墳2基が近接し、墳丘規模・埋葬施設などの様相は兜山古墳によく似ている。また、中野市七瀬古墳群もほぼ同時期の様相の類似した古墳群である。京塚古墳のほうが規模・副葬品・立地などの点で小首長墓的である。七瀬古墳群は時期の先

行する大型前方後円墳七瀬双子塚に近接し、京塚古墳はそれより約2km離れる。同時代においては京塚古墳のほうが優越する。

新潟県六日町の飯綱山古墳群や上越市の黒田古墳群は5・6世紀の群集墳である。前者は数十基から成る円墳群で、直径30m以上のものが多く、地域首長墓と見られるものも含まれる。後者の多くは直径数mから10mの小型で低平な円墳で、墳丘施設をもたない。ともに埋葬施設は木棺直葬で副葬品は豊富ではない。飯綱山古墳群中には兜山古墳に様相の似たものが見受けられる。

兜山古墳も先行する首長墓の存在が今のところ考えがたいことから、これらに見られるような、5・6世紀の木棺直葬にちかい可能性を考えておきたい。飯綱山古墳群や黒田古墳群で一定の時間的・社会的広がりを持った契機が、ここでは京塚古墳同様、2世代・古墳2基という限られた時間と、限定された社会的位置にしか存在しなかったことの反映であろう。それは基盤が小さいとはい小首長ともいいう存在が、一定期間継続したことを見出している。

#### 兜山古墳の歴史的位置

佐久平周辺の古墳で年代のさかのぼるものとして、佐久市の瀧峰古墳群が知られる。これは七器祭祀を主体とし、墳丘施設や副葬品の点で畿内型古墳とは異なり、弥生後期に各地に見られる墳丘墓の系譜を引くものと考えられる。その後の4・5世紀の古墳はあまり明確ではなく、数多い後期古墳との間には年代的に断絶がある。

ところで、首長墓が築かれる場所は、周辺での集落遺跡の展開などから、古墳造営の経済的基盤としての農業生産力の地域内での優越性を指摘できことが多い。けれども、いうまでもなく古墳の築造はその社会的政治的成長や経済的優越を示すだけではなく、それだけでは決定されない対外的な関係性をも示している。古墳の規模の大小や有無が、そのまま首長権あるいは地域社会自体の盛衰を示すわけではない。瀧峰古墳群に見られるように早い段階で古墳が造られる契機がもたらされたにもかかわらず、その後、この地域でそれが失われたことは、ここが東西日本を結ぶ重要交通路の中繼点であったが故ではなかろうか。つまり、古墳時代初期に広域の交流が始まったとき、交通路であるがゆえに真っ先に対外的な関係を持ちえた結果が瀧峰古墳群である。その後、交流の焦点が東国へ移ってゆくななく、この地域は古墳築造という点では政治的重要性を失っていたといえるかもしれない。

この地は古代から近世に至る間、東国と西国を結ぶ重要交通路だった。古東山道に関しても、古墳時代初期の遺跡が多く、また、遠隔地との直接交流を示す外来系土器の存在、前方後方墳形墳丘墓の存在などから、広域にわたる主要交通路であったことが確実である。とくに3・4世紀における列島内の交流ルートと東西関係において、ある時点ではこの地域が最大の焦点となったこともあったと考えられる。近年、村内でも古墳時代初期の集落が数多く明らかになってきており、その分布密度はほかの地域と比べても多い。そしてその規模が大きくなる古墳時代初期の短期間に限られ後世に継続しないことも特徴的である。これもまた上記のような事態にかかる集落のすがたかもしれない。

その後、古墳時代中期の中小豪族に及ぶ政治的再編は、全国的に古墳築造主体の拡大を見せている。北陸では5世紀には首長墓も含め円墳が卓越し、前代の前方後円墳・前方後方墳が中絶する。この時期に、円墳主体の群集墳が形成されるのが信越国境の越後側の状況である。同時期、善光寺平では前方後円墳が新たな地域にも築造され最盛期を迎えるが、後の時代には継続せず、5世紀半ばから6世紀に入るころを以って前方後円墳の築造を終える。県内でも、古墳築造が前期古墳以後中絶したり、それまで古墳がなかった松本・諏訪地域などで、首長墓としての円墳が新たに築かれる。現象は一見異なっているが、大きく見ればこの時期の政治的再編成を表すものであることに違いはない。兜山古墳の地理的位置は、この動

きが松本・諏訪・佐久の三地域の関係とも無縁ではなかったことを示しているように思われる。

兜山古墳は大きく見れば、5世紀後半期の全国共通の動きがこの地域にも及んだ表れであるが、その時点で佐久平の入口という交通上の位置が、再び重要性を持つことになったであろう。その地に築かれた兜山古墳も、地域間あるいは広域の交流が古墳形成に大きくかかわっていたことを示している。そして、この地域の占墳時代史の時間的・空間的空白を埋め、さらに県内各地域間の交流の一端を示す重要資料といえよう。

(文責 上屋 積)

【参考文献】

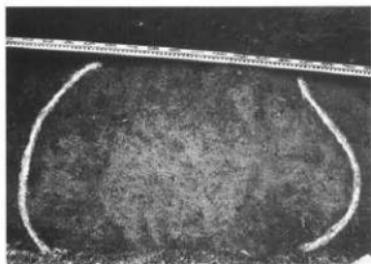
- 橋本博文・ほか『発掘された北陸の古墳報告会資料集』まつおか古代フェスティバル実行委員会(1997福井)  
岩崎卓也・ほか『七瀬古墳群・田麦中畝古墳群』中野市教育委員会(1989長野)  
甘粕 健・ほか『東日本の古墳の出現』山川出版(1994東京)



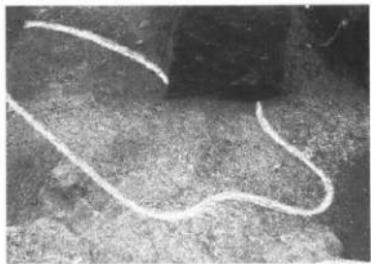
P L 1 第1号古墳遠景（北より）



P L 2 第2号古墳遠景（北より）



P L 3 第1号古墳粘土範囲2検出状況（南より）



P L 4 第2号古墳粘土範囲1検出状況（北より）



P L 5 第1号古墳粘土範囲1検出状況（東より）



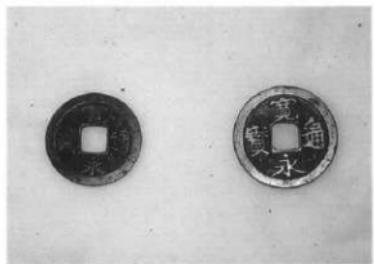
P L 6 第2号古墳粘土範囲1検出状況（東より）



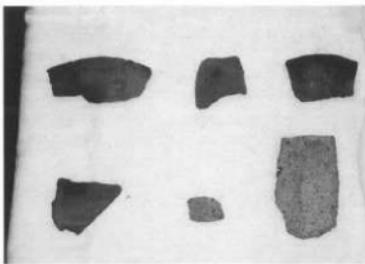
P L 7 第2号古墳粘土範囲2検出状況（西より）



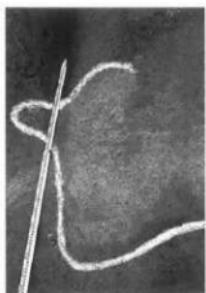
P L 8 第2号古墳粘土範囲2検出状況（東より）



P L 9 兜山古墳出土古銭



P L 10 兜山古墳出土土器および石器



P L 11 第1号古墳粘土範囲1検出状況（東より）



P L 13 現地説明会（第2号古墳墳頂にて）



P L 14 調査団スナップ（第1号古墳墳頂にて）



P L 12 第1号古墳粘土範囲1および2検出状況(西より)



P L 15 第1号古墳粘土範囲1および2検出状況(東より)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	かぶとやまこふんしくつちょうさほうこくしょ								
書名	兜山古墳試掘調査報告書								
シリーズ名	浅科村文化財調査報告								
シリーズ番号	第15集								
編著者名	福島邦男・土屋 積・田中浩江								
編集機関	浅科村教育委員会								
所在地	長野県北佐久郡浅科村大字八幡229								
発行年月日	2004年2月29日								
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象 面積	調査面積	調査原因
		村遺跡番号	県遺跡番号						
兜山古墳群	長野県北佐久郡 浅科村蓬田字島 久保八幡字砂山	117・118	一	36° 15' 53"	138° 23' 18"	20030505 / 20030530	5131m <sup>2</sup>	189.45m <sup>2</sup>	浅科村史編纂 事業に伴う試 掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	出土遺物		特記事項			
兜山古墳群	古墳	古墳時代	埋葬施設	土師器・黒耀石 打製石斧		埋葬施設として粘土塚の可能性 あり			

浅科村文化財調査報告書

- 第1集 『土合1号墳の調査』(1969年)
- 第2集 『矢嶋城跡』緊急発掘調査報告書(1985年)
- 第3集 『五郎兵衛用水』矢嶋城跡腰曲輪部に開いた用水路の調査(1987年)
- 第4集 『矢嶋城跡』第2曲輪部の建築遺構(1988年)
- 第5集 『矢嶋城跡』主郭部の試掘調査(1991年)
- 第6集 『砂原遺跡』洪水に埋もれた耕地と古代の村(1993年)
- 第7・8集 『矢嶋城跡』村道2-8号線道路改良工事に伴う発掘調査(1996年)
- 第9集 『御馬崎古城跡』村道北-50号線道路改良工事に伴う発掘調査(1996年)
- 第10集 『寺田遺跡』古東山道・中仙道沿いの村(1995年)
- 第11集 『入の沢遺跡』村道悪地山線農道改良工事に伴う発掘調査(1997年)
- 第12集 『大平遺跡』宅地造成に伴う発掘調査(1998年)
- 第13集 『原遺跡』宅地造成に伴う発掘調査(2001年)
- 第14集 『海戸田A遺跡』保健センター建設事業にかかる発掘調査(2002年)

浅科村文化財調査報告 第15集

兜山古墳試掘調査報告書

発 行 2004年2月29日

発行者 浅科村教育委員会  
長野県北佐久郡浅科村大字八幡229  
TEL 0267-58-3360 FAX 0267-58-3380

印 刷 ほおづき書籍株式会社

